

こぶたのリコション

昔むかし、ブーヴレの山のふもとに、貧しいお百姓が住んでいました。お百姓は、せつせと働いて、一年目の終わりにあひるの子を一羽買いました。二年目の終わりにはがちようの子を一羽買い、三年目の終わりにはこぶたを一匹買いました。こぶたはとても賢くて、リコションと呼ばれました。

あひるとがちようとこぶたのリコションは、とても仲良しで、いつもいつしよに眠りました。

四年目の終わりに、お百姓は小さな畑を買いました。すると、お金がぜんぶなくなってしまうました。そこで、お百姓は、おかみさんにいいました。

「おれたちにはもう、リコションたちのえさを買うお金がなくなってしまった。だから、あいつらを殺して食べることにしよう。クリスマスにあひるを食べて、正月にがちようを食べて、一月のお祭にはリコションを食べよう。そうすりゃ、お祝いごとにごちそうを食べられるし、あまつた肉は冬のために残しておけるぞ」

裏庭にいたリコションは、これをぜんぶ聞いてしまいました。そこで、あひるとがちようの所へ走っていいました。

「ご主人がぼくたちを食べようとしているよ。ぼくについておいで。山へ逃げて森の奥にかくれよう」

あひるとがちようとリコションは逃げだしました。

森の中をしばらく行つたところで、あひるがいました。

「リコション、くたくたにくたびれて、もう歩けないよ」

「じゃあ、きみの羽をむしってごらん。小さな家をこしらえてあげるから」

あひるは羽をむしり、リコションは、あひるの羽とわらと小枝で小さな家をこしらえました。あひるはその家で暮らすことにしました。

リコションとがちようがしばらく行つたところで、がちようがいました。

「リコション、くたくたにくたびれて、もう歩けないよ」

「じゃあ、きみの羽をむしってごらん。小さな家をこしらえてあげるから」

がちようは羽をむしり、リコションは、がちようの羽とイ草と木の枝で小さな家をこしらえてやりました。がちようはその家で暮らすことにしました。

リコションは、長いこと長いこと歩いて、くたくたにくたびれたので、いばらの下にもぐりこんで休みました。うとうとしていると、荷車の通る音で目が覚めました。荷車には板切れがどっさり積んでありました。リコションはそつと荷車の後ろによじのぼり、板切れを半分ばかり滑らせて道に落としました。それからくぎの入ったふくろを持って、荷車から飛び降りました。リコションは、その板切れできれいな家をこしらえました。小さな戸と窓と煙突のある家でした。リコションはその家で暮らしはじめました。

さて、森にはおかみが住んでいました。

ある日、おおかみは、あひるの家の戸口にやって来ていました。

あひる、あひる、戸を開けておくれ。さもないと、

ひっかいて、

おならして、

息を吹きかけるぞ

おまえの家はつぶれるぞ

あひるはいいました。

おおかみ、おかみ、おまえなんかこわくない

ひっかいてごらん

おならしてごらん

息を吹きかけてごらん

ぼくの家はびくともしない

おおかみは、屋根に上がり、ひっかいて、おならして、息を吹きかけました。家はつぶれました。あひるはあわててがちようの家に逃げていきました。

「がちよう、がちよう、早く開けて。おおかみが食べにきた」

がちようはあひるの中に入れて、とびらにつっかえ棒をしました。そこへ、おおかみがやって来ていいました。

がちよう、がちよう、戸を開けておくれ。さもないと、

ひっかいて、

おならして、

息を吹きかけるぞ

おまえの家はつぶれるぞ

がちようはいいました。

おおかみ、おかみ、おまえなんかこわくない

ひっかいてごらん

おならしてごらん

息を吹きかけてごらん

ぼくの家はびくともしない

おおかみは、屋根に上がり、ひっかいて、おならして、息を吹きかけました。家はつぶれました。あひるとがちようはあわててリコシヨンの家に逃げていきました。

「リコシヨン、リコシヨン、早く開けて。おおかみが食べにきた」

リコシヨンはふたりを中に入れて、とびらにかんぬきをかけました。そこへ、おおかみがやって来ていいました。

リコシヨン、リコシヨン、戸を開けておくれ。さもないと、

ひっかいて、

おならして、

息を吹きかけるぞ

おまえの家はつぶれるぞ

リコシオンはいいました。

おおかみ、おかみ、おまえなんかこわくない

ひつかいてひつかいてごらん

おならしておならしてごらん

息を吹きかけて吹きかけてごらん

ぼくの家はびくともしない

おおかみは、屋根に上がり、ひつかいて、おならして、息を吹きかけました。けれども、家はびくともしません。もういちど、ひつかいて、おならして、息を吹きかけました。やっぱり家はびくともしません。

おおかみは、がっかりしていいました。

「リコシオン、きみに悪さをする気はないんだ。明日の朝、むかえに来るから、いっしょに果物畑へさくらんぼを取りにいこうよ」

つぎの朝、リコシオンは、とても早く起きてさくらんぼを取りにいきました。そして、おおかみがむかえに来たときには、もううちに帰っていました。

「リコシオン、リコシオン、むかえにきたよ」

「ぼくは、もうずいぶん前に帰っているよ。さくらんぼはぜんぶ取ってきたよ。戸口の前の種を見てごらん」

「リコシオン、おれにも少しおくれ」

「ああいいよ。こっちへおいで、おおかみくん。窓のそばで口を大きく開けてごらん」

おおかみが窓のそばで大きな口を開けたので、リコシオンは、シャベルに熱い灰と燃えている炭をいっぱいすくって、おおかみの口に放りこみました。おおかみは、わあわあ叫んでつばをはきながら逃げていつてしまいました。

けれども、しばらくすると、おおかみは、またやってきていいました。

「リコシオン、きみを恨んではないよ。あした、サン・ブリで市が立つんだ。むかえに来るからいっしょに行こう」

つぎの朝、リコシオンは、とても早く起きて市へ出かけていきました。おおかみがむかえにきていいました。

「リコシオン、リコシオン、むかえにきたよ」

すると、あひるとがちようがいいました。

「リコシオンは、夜が明けるずっと前に出かけたよ」

「よし、それじゃあ、途中で見つけよう」

おおかみは、そういつて走っていきました。

リコシオンは、市でジャガイモを煮る大きななべを買いました。帰るとちゅう、長い坂を下りて角を曲がると、おおかみがやって来るのが見えました。そこで、リコシオンは、なべをひっくり返してその下にかくれました。おおかみは、なべの所

まで来ると、

「なんだ、このおかしなものは。はあん。きつと疲れた旅人が座するためのいすなんだな。ここでリコションを待つとしよう」といって、なべの上にすわりこみました。けれども、いくら待ってもリコションはやって来ません。おかみは、待ちくたびれて立ちあがると、なべにおしっこをひっかけて、行ってしまうました。リコションは、大急ぎでなべをかついで帰りました。

ゆうがた、おかみがやって来ていいました。

「リコション、リコション、市で会わなかったね」

「ぼくはきみに会ったよ。きみのすわったなべの下にいたのさ。きみ、行ってしまう前におしっこをしただろう」

「リコション、きみを恨んではないよ。あした、木こり小屋の向こうのなしの木に、なしを取りにいこう。むかえに来るからいっしょに行こうよ」

つぎの朝、リコションは、とても早く起きてなしをとりに行きました。おかみがむかえにきていいました。

「リコション、リコション、むかえにきたよ」

すると、あひるとがちようがいいました。

「リコションは、たった今出かけたよ」

「よし、こんどこそ、つかまえてやる」

おかみは、そういつて、走って行きました。

おかみが、なしの木まで来ると、リコションは、木に登ってなしをもいでいるところでした。

「リコション、こんどこそ逃がさないぞ」

「まず、なしをお食べよ、おかみくん。落としてやるから、ほら、取りな」

おかみが大きな口を開けた所へ、リコションは、石を投げつけました。おかみは歯が二、三本折れてしまいました。リコションはいそいで木から下りてうちに向かって走りました。

ところが、木こり小屋のそばまで来たとき、おかみにつかまってしまうました。

「リコション、おれをだますのは終わりだ。おまえを食ってやる」

「しかたがない。でもその前に、この切り株に座って口をおふきよ。血が出ているよ」

おかみは、切り株にこしを下ろしました。切り株には裂け目が作ってあって、裂け目が閉じないようにくさびを打ちこんであります。リコションは、こっそりおかみのしっぽを裂け目におしこんで、くさびをはずしました。バチン！裂け目が閉じて、おかみのしっぽがはさまりました。どんなに引っぱってもしっぽはぬけません。リコションは、大声でさげばしました。

「おかみだ！おかみだ！」

たちまち、木こりたちがとんできて、おかみを見つけると、棒でさんざんたた

きめしました。おおかみは、ちょん切れたしつぽを切り株に残したまま、やつのことで逃げていきました。そして、二度とブーヴレの山にもどってきませんでした。

それからというもの、あひるとがちょうトリコシヨンは、小さな家で平和にくらししましたとき。

原話：『フランスの昔話』アシル・ミリアン／ポール・ドラリュ／

新倉朗子訳／大修館書店

再話：村上郁